

V 調査のまとめ

1. 調査の成果

上早見新田西遺跡は、久喜市大字上早見字新田に所在している。遺跡の周辺は、関東造盆地運動の影響で沈降して低地化した地域にあたる。そのため現在ではローム台地は埋没しており、一部が微高地状となって残存している。低地化は弥生時代以降とされていることから、縄文時代ではこの地域は、大宮台地と群馬県南部の館林台地とを繋ぐローム台地であったと考えられている。遺跡はそうしたローム台地の縁辺に立地していたと考えられる。

今回の調査では、縄文時代後期、近世の遺構・遺物を検出した。遺跡の中心となる時期は、縄文時代後期初頭である。検出遺構は、縄文時代後期初頭の住居跡5軒、縄文時代後期初頭から前葉の土壇13基、近世の溝跡2条である。

2. 縄文時代後期初頭の出土土器について

調査区内からは、縄文時代後期初頭から前葉の土器群が検出され、そのほとんどが後期初頭の称名寺式土器であった。遺構内、外で出土した称名寺式土器には、大きな時期差は認められなかった。そこでここでは、遺構出土土器を中心に、検出された称名寺式土器の時間的な位置付けについて考えていきたい。

遺構出土土器としては、住居跡からは小破片が検出されたのみであるため、第1号土壇、第3号土壇出土土器を中心に考えていくこととする。

第30図1～7は第1号土壇から検出された土器である。1・2は、文様内に縄文を充填するもの、3・4は列点文を、5～7は無文のものである。1や5など、波状口縁の波頂部に綱取系の把手を貼付する土器が含まれる。文様端部は、胴部下半の破片（第16図）から、開放され懸垂文状となっている。

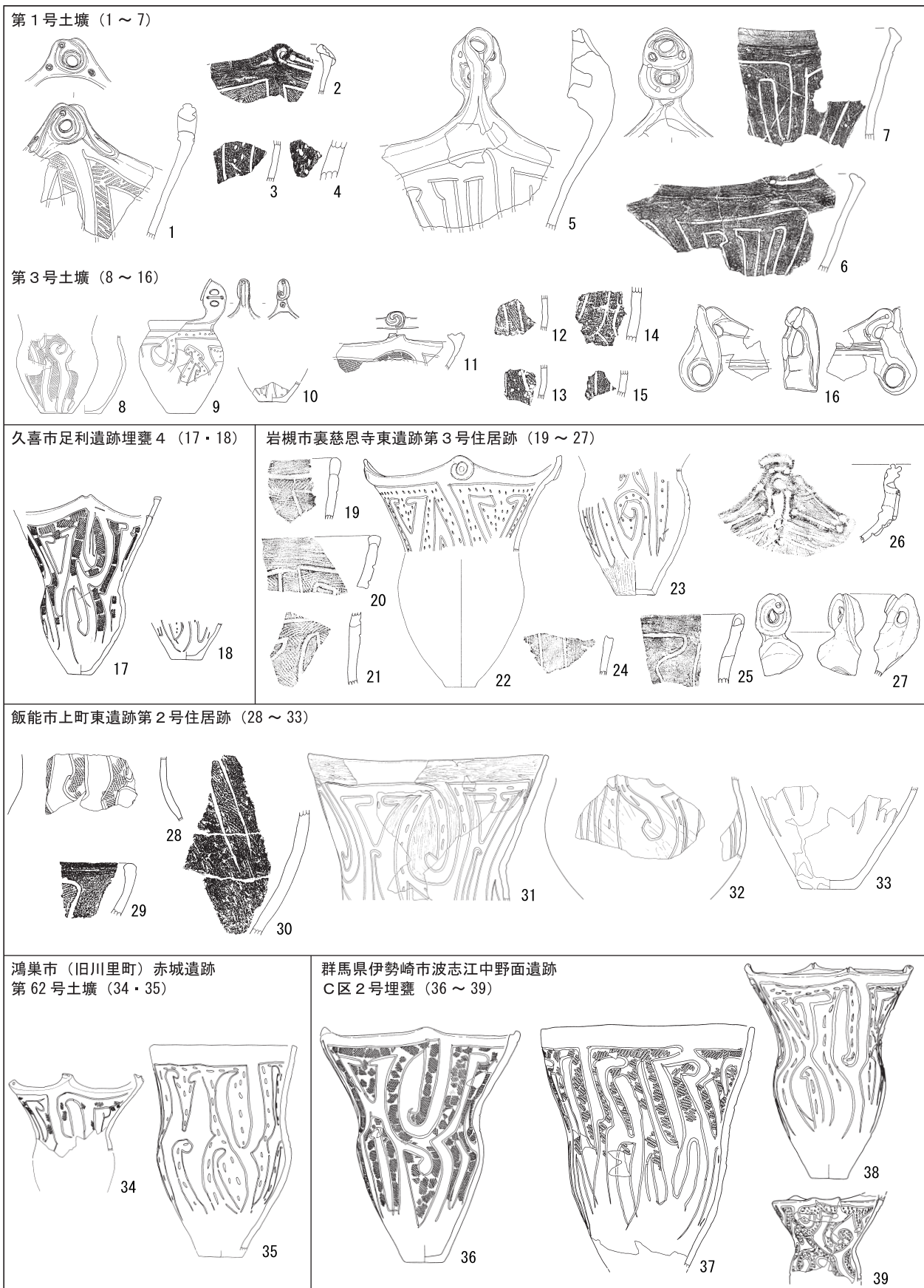
縄文時代後期においては、遺跡が立地する同じローム台地上では、反対の北東側の台地縁辺から数多くの遺跡が検出されている。それと比較すると、上早見新田西遺跡が立地する南西側は、遺跡の分布は希薄である（第2図）。今回、後期初頭の集落が検出されたことは、台地南西側の遺跡が縁辺に立地している場合、埋没しているため検出されていない可能性が高いことを示している。

大宮台地上では、中期末葉から後期初頭になると、分散化した小規模な集落が台地の縁辺部に形成される傾向にあると指摘されている（金子2006・2007）。上早見新田西遺跡周辺も、同様の傾向を示している可能性が高く、今回の調査は遺跡の分布を考える上で大きな成果を上げることができたといえる。

第30図8～16は第3号土壇から検出された土器である。8・11～13は文様内に縄文を、9・10・15は文様内に列点文を充填し、14は無文である。16は注口部分である。9など口縁部に綱取系の把手を持つ土器が含まれている。文様の端部は開放され懸垂文状となっている。

第1・3号土壇出土土器の共通する特徴は、文様内充填が縄文充填の他、列点文や無文の土器が出土すること、文様の端部が開放されること、綱取系の把手などがあげられる。文様内には数は少ないものの、条線を充填する土器も検出されている。縄文、条線、列点、無文の比率に差はあるものの、他の遺構出土土器も特徴はほぼ共通している。また、グリッド出土土器の称名寺式土器についても同様であった。

次に、これらの特徴を持つ、土器群が称名寺式土器のなかで、どの段階に相当するかを他の遺跡



第30図 後期初頭の土器群

出土土器と比較し、考えてみたい。

称名寺式土器の細分については、鈴木徳雄氏が、「称名寺式にかんする交流研究会」において7段階の変遷案を示し（鈴木1985）、以降7段階の変遷について検討されてきた。第20回縄文セミナーにおいて、第1段階はⅠa式、2段階・3段階はⅠb式、4段階・5段階はⅠc式、6段階・7段階はⅡ式として7段階に細分されている（鈴木2007）。

この6段階の土器群として、岩槻市裏慈恩寺東遺跡第3号住居跡（第30図19～27）、飯能市上町東遺跡第2号住居跡（第30図28～33）、鴻巣市（旧川里町）赤城遺跡第62号土壇（第30図34・35）が挙げられている（鈴木2007）。

裏慈恩寺第3号住居跡からは、文様内に縄文充填（19～21）、列点（22・23）、条線（24）、無文（25）の土器、綱取系の把手（27）が検出されている。また上町東遺跡第2号住居跡からは、文様内に縄文充填（28～30）、列点（31・32）、無文（33）の土器が検出されている。

この6段階の土器群は、縄文充填が少なくなり、列点文が一般的になるとされている。上早見西遺跡では列点文主体というよりも、文様内の地文充填が、縄文、列点文、条線、無文とバリエーショ

ンが増えた様相を示している。また、綱取系の立体的な把手が伴うことも特徴の一つである。

地文充填の変異については、6段階の時期の久喜市足利遺跡埋甕4（第30図17・18）、赤城遺跡第62号土壇、群馬県伊勢崎市波志江中野面遺跡C区2号埋甕（第30図36～39）出土の、同時性の高い土器の組み合わせからも指摘できる。これらの土器は、縄文充填と列点文のセットとなって出土している。このことから、6段階においては縄文充填が減少したのではなく、地文充填の変異が増加する段階と考えることもできる。

これら土器群との比較から、第1号土壇、第3号土壇出土の土器群は、特徴からすると6段階に相当すると考えられる。しかしながら、6段階資料の検討は、県内では良好な一括資料が少ないことや、加曽利E式系土器や綱取系土器との関係が不明な点も多いことから、周辺地域との比較も含め、今後の課題としたい。今回は上早見新田西遺跡における土器群の特徴を、6段階のものとして捉えておくこととしたい。

以上のように、上早見新田西遺跡の遺構出土の称名寺式土器群は、文様構成や充填文の要素等から称名寺式土器の6段階、称名寺Ⅱ式土器に相当すると考えられる。

引用・参考文献

- 金子直行 2006「縄文中期型環状集落解体への序章―「時（クロノス）」としての土器からみた「場（トポス）」としての集落変遷―」『ムラと地域の考古学』同成社
- 金子直行 2007「縄文中期型環状集落の解体過程からみた縄紋社会―複雑系科学の視点から―」『縄紋社会をめぐるシンポジウムⅤ 縄紋社会の変動を読み解く 予稿集』縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所
- 久喜市史編さん室編 1989『久喜市史 資料編。考古 古代・中世』久喜市
- 久喜市史編さん室編 1992『久喜市史 通史編 上巻』久喜市
- 鈴木敏昭他 1980『足利遺跡』久喜市埋蔵文化財調査報告書 久喜市教育委員会
- 鈴木徳雄 1990「称名寺式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 2007「称名寺式土器研究の諸問題」『中期終末から後期初頭の再検討』第20回縄文セミナー
- 角田芳昭 2002『波志江中野面遺跡（2）―縄文時代編―』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第296集
- 並木 隆 1978『裏慈恩寺東遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書 第33集
- 橋本 勉 1988『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第74集
- 渡辺清志 2006『上町東／旭原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第324集